

Patient Centricity

患者さんが治療において希望を見出ししていく——その力の一端を担いたいという想いが、私たちの全ての企業活動を推進する原動力となっています。常に患者さんに真摯に向き合い、その声を起点として、創薬・開発・製造・情報提供など、バリューチェーン全体において価値の共創を推進しています。Patient Centricityの実現に向けた取り組みは、グローバルかつクロスファンクショナルに強化を図っています。

Patient Centricity特命担当のメッセージ

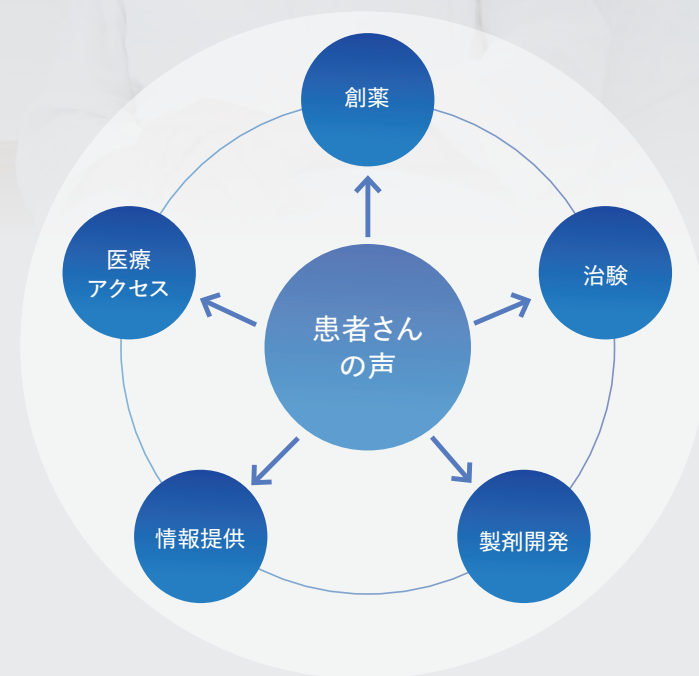


取締役 常務執行役員
ジャパンビジネスユニット長
日本事業ユニット長
兼 メディカルアフェアーズ本部長

上野 司津子

Patient Centricity特命担当を拝命して1年半が経過しました。その間、第一三共の社内外におけるさまざまな活動や取り組みに参加してきました。第一三共には「患者さんに医薬品を通じて貢献したい」というPatient Centric Mindsetを持つたくさんの人材が働いており、その想いは創業時より企業文化として根付いています。そうした社員たちが集い、自らの言葉でPatient Centricityについて語り合い、意見交換し、日々の業務を通じて患者さんへの貢献に挑戦する——そのような取り組みを通じて、第一三共の組織内におけるPatient Centricityのさらなる推進が図られるとともに、部門や機能の枠を超えた連携が社内随所で見られた1年半でもありました。

そして、私たちのイノベーションの源泉であるPatient Centricityは、One DS Cultureとも融合しながら、さらに組織全体で垂直的・水平的に広がっています。患者さんの声に真摯に向き合い、飽くなき挑戦を継続することが、私たちのパーパス実現に結びつくと確信しています。



Patient CentricityのOne DS Cultureへの融合

グローバルHRが主催するGlobal Culture Initiative Leadership Forumには、当社グループのグローバル組織から約150名のリーダーが参加しました。本フォーラムでは、各組織のリーダーが第一三共および自組織のビジネス課題に向き合いながら、地域や部門を越えてCore Values、Core Behaviors、そしてPatient Centricityの観点で議論しました。特に、Patient Centricityについては、今後、自組織でどのように具現化し、成果につなげていくかについても活発な意見交換が行われています。また、One DS Cultureの主要な構成要素であるPatient Centricityを、パーパス実現に向けた重要な取り組みと捉え、組織の将来の方向性と重要な価値観を再確認する貴重な機会となりました。



組織での 垂直 の浸透

次世代リーダーおよび新入社員での取り組み

新入社員やグローバル組織を率いる次世代リーダーたちが、キャリアの段階や役職に応じて「Patient Centricity」を考え議論することで、組織内で垂直方向に「Patient Centricity」の浸透を推進しています。

leader層 の事例

次世代グローバルリーダー育成を目的とするプログラム「DS Academy」では、グローバルの各部門の将来を担うリーダーたちが一堂に会して、「Patient Centricityとは何か」、「なぜ重要なのか」を改めて問い直し、自分自身の所属する部門の業務にどのように反映していくのかを考える場となりました。

DS Academyの詳細については [P34](#) をご覧ください

junior層 の事例

研究開発本部およびテクノロジー本部は、それぞれの新卒入社導入研修の中でPatient Centricityをテーマとしたセッションを設けています。第一三共でキャリアをスタートさせるにあたり、製薬会社の一員として、そして第一三共の社員として、これから自分たちが大事にすべきことは何かを仲間と一緒に考える機会となっています。



組織での 水平 の浸透

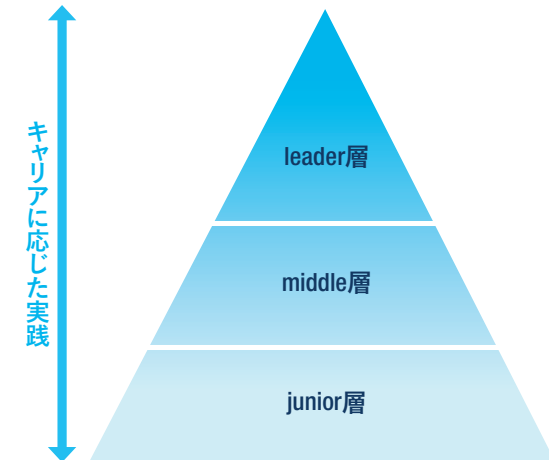
日本におけるバリューチェーン連携体制

これまで日本国内の各組織や各バリューチェーンで個別に行われていたPatient Centricity活動を有機的につなぐため、各担当者が連携する仕組みとしてクロスファンクショナルなワーキンググループを新たに構築しました。このグループでは、Patient Centricityの取り組みの計画や実績、ベストプラクティスを相互に共有し、第一三共として患者さんとの連携を強化することを目指しています。加えて、患者さんの声を各バリューチェーンに横断的に反映させることで、全社的な価値創出につなげていくことを目的としています。

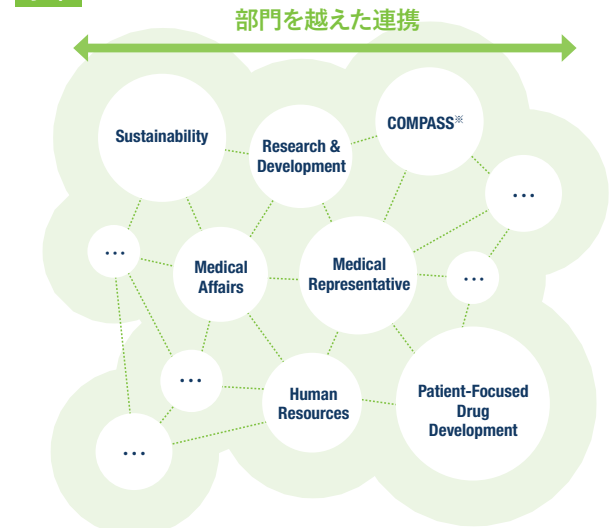
このように、研究、開発、製造、製品の情報提供に関わる各部門の担当者が連携し、患者さんが直面する課題を知り、組織内における「Patient Centricity」の水平方向への浸透を推進しています。

垂直・水平に広がる 第一三共グループのPatient Centricity

垂直



水平



※Compassion for Patients Strategy活動: 患者さんとの交流活動により疾患・治療に関する実態および患者ニーズを理解する取り組み

患者さんの声を起点にした活動事例

事例 1

日本の医療現場の声を 起点にした価値共創

医療現場での対話を通じて、患者さんや患者さんに最も近い医療関係者が抱える課題やニーズを的確に把握し、製品やサービスに反映する取り組みを推進しています。当社社員が医療機関を訪問し、医療機関の見学や医療関係者との意見交換を行うことで、現場の実態や課題やニーズへの理解を深めています。

医療関係者との対話会では、具体的な取り組みを検討する機会となっています。例えば、注射剤に関して凍結乾燥製剤の再溶解手順を実際の調製手技に従い医療関係者に実演していただき使用実態の理解を深めています。さらに製品設計に関わる設計者側の疑問点、使用現場の具体的な困りごとや負担感の意見交換でいただいたご意見を、現場のニーズに即した製剤処方設計やデバイス仕様などの製品設計に活かし、医療安全、医療現場の業務環境の改善への貢献を目指しています。

これらの取り組みは、開発中の新製品にとどまらず、既に上市されている製品の継続的な改善にも展開されています。



事例 2

小名浜工場におけるPatient Centricity ～グローバルリーダーとの対話を通じた意識の連携～

当社の米国および欧州のオンコロジービジネスユニット(OBU)のリーダーたちが、重要なADC製造拠点の一つである小名浜工場を訪問しました。小名浜工場は、30年以上に亘り主力製品の原薬製造を担ってきました。現在は、バイオ医薬品の製造体制への転換を加速させており、より効果的かつ患者さんのニーズに即した製品を提供するための重要な生産拠点として、その役割を進化させています。今回の訪問では、リーダーたちが、実際のがん患者さんの声や感謝の気持ちを工場の社員と共有しました。製造現場では、日常的に患者さんと直接接する機会が限られているため、こうした「想い」の共有は、社員一人ひとりが医療の最前線に関わっているという意識を高めるきっかけとなりました。自身の業務の意義を再認識し、工場全体としても、患者さんの視点を意識した生産活動への意識が一層高まりました。



事例 3

ドイツから広がるPatient Advocacy※の実践 ～O-MAMORI-AWARDの設立～

第一三共ドイツGmbHの循環器部門とがん部門の社員が中心となり、「O-MAMORI AWARD」という取り組みを行いました。本アワードでは、心血管疾患やがんの患者さんを支援するために尽力している個人や小規模な地域団体を表彰しました。この取り組みは、循環器およびがん領域に携わる社員の強い想いから企画されたものであり、疾患領域や地域、対象プロジェクトの違いを越えて、社員一人ひとりが共有するPatient Centricityへの想いを原動力に推進されました。部門の枠を越えた連携やチーム間の協働を促進するとともに、患者さんのケアに対する新たな視点や解決策を創出する機会にもなっています。実際に支援を受けたコミュニティにおいては、患者さんのQOL向上に貢献する成果が数多く生まれています。本AWARDは、単なる社内活動にとどまらず、医療業界におけるPatient Centricityの実践と対話を促進するプラットフォームとしても機能しています。

※ 患者さんの立場に立って、政策や制度面から問題解決に取り組む活動



写真提供: Christoph Jackschies

事例 4

「生活者」としてのがん患者さんに 寄り添うセルフケアの取り組み ～QOL向上への取り組み～

第一三共ヘルスケアは、がん治療中および治療後に皮膚トラブルに悩む患者さんを支援するため、皮膚ケア情報サイト「はだカレッジ」を運用しています。このウェブサイトは、がん治療に伴う皮膚の変化やトラブルへの正しい理解と対処法に関する情報を提供し、患者さんが治療中や治療後の生活をより前向きに捉えるためのサポートを目的としています。さらに、治療後のスキンケアや心の健康に焦点を当てた「肌ケアセミナー」も定期的を開催しています。治療に伴って悩む方が多い外見のケアと心のセルフマネジメントに関する情報を提供することで、治療中や治療後の生活をより前向きに捉える力を育むことを目的としています。また、がん患者さんを対象にした座談会、さらには看護師などの医療関係者などからのヒアリングを通じて得られた当事者の声を活動に活かしていく機会を設けています。これにより、患者さんが抱える課題やニーズをより深く理解し、製品・サービスの改善につなげる好循環を生み出しています。これらの取り組みは、患者さん本人だけでなく、その周囲の人々や医療現場など、患者さんを中心とした支援ネットワークの形成にも寄与しています。

